

北海道産学官研究フォーラム

通信規格活用探る 農作業自動化さらに

トラクターと作業機 連携

民間企業や大学、行政などで組織する北海道産学官研究フォーラムは25日、農機の国際通信規格「ISOBUS」をテーマに札幌市でセミナーを開いた。同規格に対応したトラクターや作業機の導入が進む中、同規格による技術高度化の可能性を共有するのが狙い。共通通信規格の必要性や、作業機側からトラクターを制御する欧米の技術開発動向などが報告された。

ISOBUSは、異なる農機メーカーのトラクターと作業機などでも互いに通信できる国際規格。操作端末の統一や、トラクター情報を使った作業機との連携、作業情報の自動記録なども支援

する。帯広市にある農業情報設計社の濱田安之代表は「トラクターに加えて、作業機の自動化が非常に重要だ。両方そろって作業の高度化ができ、そのために通信規格の共通化

が必要だ」と強調。世界的にISOBUS対応の農機や作業機が増えており、国内農機メーカーも同規格の対応機を販売している現状を説明した。作業機側からトラクタ

ーを制御する技術の開発が進んでいる欧米の動向も解説。トラクターを制御する播種（はしゅ）機など、トラクター側と作業機側が車速やエンジン回転数などの作業データを相互通信し、作業を高度に自動化している事例を報告した。

農研機構・北海道農業研究センターは、ISOBUS対応のトラクターで作成できるサブソイラのけん引負荷マップや、燃料消費マップを紹介した。収量や施肥、生育マップなども合わせ、作業情報の蓄積により圃場（ほじょう）ごとの特性を把握できると指摘した。

この他、道やヤンマー、アグリジャパンも講演した。セミナーには、ホクレンや農機メーカーの関係者ら50人が参加し